

つながり

第18号

— 一定着支援センターだより —

発行：2026年1月



内容

1. オニオンスライスさんからのメッセージ「過去の俺へ」
2. 皇學館大学 鵜沼憲晴氏「第12回社会福祉士会受託地域生活定着支援センター研究協議会に参加して」



過去の俺へ



過去の自分は、愚痴を吐ける大人がいなかったから非行の道を走った。

その結果少年院に入った。少年院の中では、「早く出たい」と思っていた。でも自宅には帰れず、グループホームと作業所の見学をした。地元に戻りたかったけど、無理だった。

入った時は、初めて来る地域で、右も左も後ろもわからない地域だった。

平日は、作業所に通いだした。最初は、内職作業をしていたが、自分には合わないと思っていた。過去は、一般で働いた経験もあるのに満足することはできなかった。

自分の気持ちを周りの支援者に伝え、外勤作業に行けることになった。外勤作業では、一般の人と混じって仕事する事に認められたと感じた。

3か月に1回会議をしてもらい、自分の想いを伝える場所もあった。

グループホームでも慣れたところに、ほかの人の行動が気になり、自立型のグループホームに変わることができた。

周りの支援者に愚痴を聞いてもらいながら、俺は「あなるんだ」「こうなるんだ」と言っていく度に、自分の希望が叶ってきた。

良いことも悪いことも言って良い、夢を本気で叶えようと思ったら周りの支援者に自分の希望を伝え、一緒に考えてもらうことが大事なんだ。

過去の俺には、話を聞いてもらえる人がいなかった。





自分のイライラを発散するために非行に走った。

ずっと施設で育ち、親の愛も感じられず、大人を信用できなかった。

でも今の俺は違う。

俺は、「ああなるんだ」「こうなるんだ」と周りの支援者に言いまくった結果が出て一個ずつ夢が叶ったのが今の自分だから頼れる支援者や周りの人に自分の夢や目標を言えば、色々な人が方法を教えてくれる。

自分の器の小ささにも気づけた。「ヤバいな、このままなら自分は変わらない」と思った。変わるきっかけをくれたのは、同じ作業所の人だった。

そこからは、頓服も飲まず薬を減らしていった。イライラしたときに少年院で学んだアンガーマネージメントを実践した。イライラしたときには、相手がいるけど「こういう人だ」と割り切れるようになった。

作業所でもリーダー的な立場になったが、相手に対して言い方を考えて伝えるようにしている。はっきり言われて傷つく人がいる事にも気づけたから、難しさや悩むこともある。

その時には、自分が言えないことを支援者に伝え、相手に分かってもらえるようになった。俺は変わった。変わるきっかけに気づくこと、周りの支援者に相談する事、一人で悩まず、周りに SOS を出せばよいと過去の俺に言いたい。

少年院から出て、7年たった俺の今は、目標にしている人物もいる。

そんな人になれるよう俺はこれからも努力していく。



「第12回 社会福祉士会受託地域生活定着支援センター研究協議会」に参加して



三重県社会福祉士会
鵜沼 憲晴(皇學館大学)

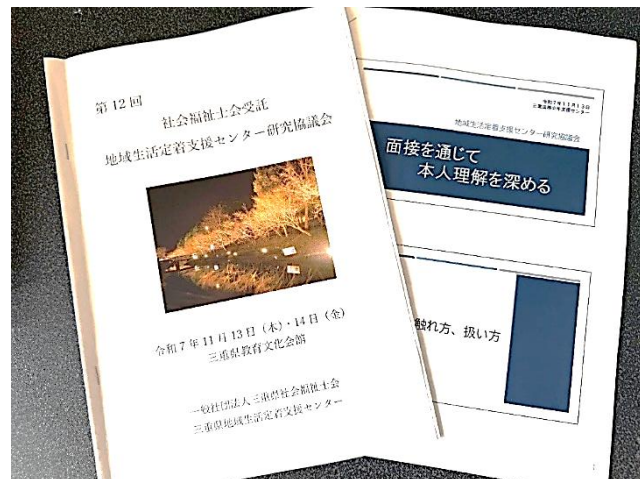
令和7年11月13日(木)～14日(金)にかけて、「第12回 社会福祉士会受託地域生活定着支援センター研究協議会」が三重県教育文化会館にて開催されました。9つの社会福祉士会受託地域生活定着支援センターが集い、両日合わせて42名の参加がありました。

筆者は、三重県社会福祉士会会員として参加させていただきました。

本稿では、当日の流れに沿って、概要と学んだことを紹介させていただきます。



13日(木)は、山本彩那氏(三重法務少年支援センター統括専門官)による講演「社会復帰等支援における心理支援について」から始まりました。非行や犯罪の背景・自己理解・今後の意向等の把握(アセスメント)、社会復帰にともなう本人・家族・受け入れ支援者の不安軽減に向けた支援等、主に心理的支援を中心にご講義いただきました。社会福祉士による社会復帰支援と共通する視点、および「内省阻害要因の把握」や「不適応防止に向けた“困り感の軽減”」等心理支援ならではのサポートについて学ぶことができました。



次に、小グループに分かれ、「面接で本人の理解にどう迫るか」というテーマで意見交換を行いました。面接の際に犯罪という過去に触れるべきか否か、「起業したい」、「有名 YouTuber になりたい」等の本人のニーズと現実が大きくかけ離れている場合にどう支援していくか、とりわけどのような項目で生活歴を把握していくか等の視点で検討し、多様なアプローチがあることを理解することができました。

また、18時からの情報交換会では、三重の特産品に舌鼓を打ちながら、楽しく親交を深めることができました。

2日目の14日(金)は、林賢太郎氏(三重刑務所統括矯正処遇官)による講演「拘禁刑導入による刑務所処遇の変化 ～定着支援センターの支援との連携に関連して～」を受講しました。法改正されたものの刑務官による対応方法を直ちに変更することは困難であること、再犯防止という目的に沿うような作業の内容・あり方が問われていること、そのために刑務所内での花壇の設置、脳トレや口腔指導等の認知症予防、身体機能維持を目的とする作業療法など様々な取り組みの試行・導入を行っていること等をご講義いただきました。

後半は、グループごとに分かれてのフリートークを行いました。その中で、地域生活定着支援センターの予算・職員数の現状、受診や買物同行を含む具体的な業務内容、フォローアップの方法や目安の期間、関係機関・団体との連携の実態、関係機関・団体および地域住民に対する周知・啓発の方法等について、情報共有や意見交換がなされました。

最後に小野田センター長から総括がなされ、閉会となりました。

筆者は、この研究協議会への参加を通じ、以下のことを学びました。第1に、社会福祉士会が地域生活定着支援センター業務を受託する意義として、アセスメント、アドボケイト、エンパワメントといった様々なソーシャルワーク・スキルが提供できる点、多機関・多職種連携や地域生活移行を含めた総合的・包括的支援ができる点等があるということです。第2に、職務内容が細かく規定されていないからこそ、多様かつ柔軟な支援を展開することが可能であるという点です。それはまさに、ソーシャルワーカーが本来もっている機能を存分に発揮できるという

ことを意味すると思います。第 3 に、小野田センター長からもご指摘があったとおり、地域生活定着支援センターの運営について安定的かつ十分な財源と職員の確保が今後の課題であるという点です。

筆者は、今後も出院者・出所者支援のさらなる充実に向け、研究に励む所存です。

最後に、この研究協議会を主催いただいた三重県社会福祉士会および三重県地域生活定着支援センターの皆様にご心よりお礼申し上げます。



センターより

今回はお二人の方に寄稿のご協力をいただきました。お忙しい中、誠にありがとうございます。

オニオンスライスさんと当センターの関わりは、現在で7年目になります。振り返ってみると、これまで様々な課題や、揺れ動く気持ちもあったかと思いますが、ご本人の諦めない気持ちと寄り添い続けていただいた周りの方々とのつながりの中で、一つ一つ積み重ね、今日があるように感じています。

また、今回の寄稿をお願いするにあたり、ペンネームも考えていただきました。いくつかの候補から、今調理の仕事をしているから“オニオンスライス”という、なんだかほっこりする由来のペンネームをお願いすることになりました。

社会福祉士会受託地域生活定着支援センター研究協議会は、全国にある地域生活定着支援センターのうち、それぞれの府県で社会福祉士会が受託している9つのセンターが参加し、課題の共有や、支援の振り返りなどを通じ業務の向上を目的に実施しているものです。コロナ禍により対面での実施が難しかった時期もありましたが、今回は三重県に各地域から集まっていたの開催となりました。ご多忙の中、講師を引き受けてくださいました、山本様、林様、ご出席の皆様にも改めてお礼申し上げます。

今後とも、地域生活定着支援センターをよろしくお願いいたします。



定着支援センターだより「つながり」

発行：三重県地域生活定着支援センター

〒514-0003

三重県津市桜橋2丁目131 三重県社会福祉会館5階

TEL：059-221-1025 FAX：059-229-1314